

# 不定語モの構造と解釈

廣永智子  
(福岡市)

tomoko.h.lt@gmail.com

キーワード：不定語モ、シカ、否定

## 1. 問題提起

本論文では、不定語モの構造と解釈を考察する。従来、不定語モには、全称量化と同じ解釈になる用法である(1)と、否定辞と共起する場合の用法である(2)があることが知られている。

- (1) 誰もがジョンを見た
- (2) 誰もジョンを見なかった

この2つの不定語モは、語彙として異なるものであり、それぞれ別の生起条件を持っているとみなされていることが多い<sup>1</sup>。しかし、(2)の意味は、いわば(3a)とも(3b)とも表現でき、(3a)は(3b)と同じ真理条件を持っている。

- (3) a.  $\forall x \neg (x \text{ がジョンを見た})$
- b.  $\neg \exists x \{(x \text{ がジョンを見た})\}$

---

<sup>1</sup> よく知られているように、この2つの用法ではアクセントパターンが異なる。["は音調の上がり目であり、"]は音調の下がり目である。

- (i) a. [ダ]レモガ 来た
- b. ダ[レモ 来なかった] [Hasegawa 1993: p.140, 注9]

また、(ii-a)、(ii-b)に示すように、全称量化の不定語モと、否定辞と共起する不定語モでは、助詞との語順が異なることがあり、一般的に(ii-c)は容認性が低いとされる。しかし、(ii-c)も、カッコ内のようにアクセントを調整すれば容認性は下がらないという事実もある。

- (ii) a. 誰もに会った
- b. 誰にも会わなかった
- c. 誰にも会った (cf.[ダ]レニモ会った)

本当に、この2つの不定語モが異なる語彙と仮定するのが適切なのでしょうか。本論文では、新たに、不定語モがシカと共起する場合の解釈に注目することによって、単一の語義から不定語モの2つの用法の解釈が導かれる分析を提示したい。

たとえば、(4)の文の解釈を考えてほしい。

(4) 誰もジョンしか見なかった (SOV)

(4)が SOV 語順の文であるとする、「どの人も、ジョン以外の人のことは見ていない、かつ、どの人も、ジョンのことは見た」と解釈できる。この場合のダレモは、「どの人も／全員が」と類似した意味を持ち、「全員」についてどうであったかを述べているものであって、「誰かがジョンのことを見た」といった意味は持たない。これに対して、(5)の文も SOV 語順の文であるとして解釈を考えてほしい。

(5) ジョンしか誰も見なかった (SOV)

(5)は、解釈できるとすれば「ジョン以外の人が見た人はいない、かつ、ジョンが誰かのことは見た」という意味である。これは、「全員」について述べている文ではない。「ジョン以外に見た人」の存在が否定されているだけであり、ジョンについても、「全員を見た」わけではなく、あくまで「誰かを見た」という意味にとどまる。(5)のダレモを、(4)のように、「ジョンが全員を見た」という解釈にとることは難しい。以下、説明の便宜上、(4)におけるダレモのように「全員」や「全部」と類似した意味を持つ場合を「不定語モの解釈 A」、(5)のような場合を「不定語モの解釈 B」と呼ぶことにする。

(4)では不定語モの解釈 A しか許されず、(5)では不定語モの解釈 B しか許されないが、これは、ダレモの意味役割によって決まっているわけではない。そのことを確認するために、(6)の解釈を考えてみてほしい。(6)は表面的には(4)と同じ文であるが、ダレモが Theme、ジョンが Agent である OSV 文であるとする。

(6) 誰もジョンしか見なかった (OSV)

この文の解釈は、「ジョン以外の人が見た人はいない、かつ、ジョンは、どの

人のことも見た」となり、(6)も(4)と同様に不定語モの解釈 A であることがわかる。また、同じことが(7)にもあてはまる。(7)は、表面的には(5)と同じ文であるが、これも、ジョンが Theme、ダレモが Agent である OSV 文であるとする。

(7) ジョンしか誰も見なかった (OSV)

この文の解釈は、「ジョン以外の人を見た人はいない、かつ、誰かがジョンのことは見た」となり、この場合も、(5)と同じく不定語モの解釈 B である。

以上の観察から、(8)が言える。

- (8) ダレモとシカがひとつの否定辞に対して共起する場合、
- a. ダレモがシカに先行していると、不定語モの解釈 A になる。
  - b. ダレモがシカに後続していると、不定語モの解釈 B になる。

ナニモとシカが共起したときも、同様のことが観察される。たとえば、(9)のような文の場合、「ジョン以外の人が見たもの」の存在が否定されているだけであり、ジョンについても、「全てのものを見た」わけではなく、あくまで「何かを見た」という意味にとどまる。これは、不定語モの解釈 B である。(10)も、「全てのものが建物を傷つけた」とは解釈できず、不定語モの解釈 B しかできない。

(9) ジョンしか何も見なかった (SOV)

- (10) (大規模な爆発で、倉庫内にあったものが四方に飛んだが、)  
建物しか何も傷つけなかった (OSV)

このようにナニモも、ダレモと同様、シカに後続しているときは、不定語モの解釈 B である。ただし、ナニモの場合、シカに先行していても、不定語モの解釈 A はあまり強くない。(11)の場合、(12a)と(12b)の解釈の容認性にあまり差はないのである。かつ、(11),(13)からわかるように、文自体の容認性もそれほど高くはない。

- (11) (大規模な爆発で、倉庫内にあったものが四方に飛んだが、)  
?何も建物しか傷つけなかった (SOV)

- (12) a. (11)が不定語モの解釈 A の場合：  
 どのものも建物以外のものを傷つけていない、かつ、どのものも建物には傷をつけた。
- b. (11)が不定語モの解釈 B の場合：  
 建物以外のものを傷つけたものはない、かつ、何かは建物を傷つけた
- (13) ?何もジョンしか見なかった (OSV)
- (14) a. (13)が不定語モの解釈 A の場合：  
 ジョン以外の人ほどのモノも見えていない、かつ、ジョンほどのモノも見た
- b. (13) が不定語モの解釈 B の場合：  
 ジョン以外の人が見たものはない、かつ、ジョンは何かは見た

ドノ NP モの場合も、ダレモやナニモに比べ不定語モの解釈 B になりにくいという点があるが、基本的には(8)に並行した解釈の分化が成り立つ。ドノ NP モがシカに先行する(15a)は、「全ての男性」という不定語モの解釈 A しかできず、「男性のうちの誰かは」という不定語モの解釈 B にはならない。しかし、シカにドノ NP モが後続する(15b)は、「花子が男性のうちの誰かは褒めた」という、不定語モの解釈 B になる。

- (15) a. どの男性も花子しか褒めなかった (SOV)
- b. 花子しかどの男性も褒めなかった (SOV)

本論文では、これらの観察に基づき、不定語モの2つの解釈についての分析を提案する。

## 2. 提案

### 2.1. 不定語モの構造

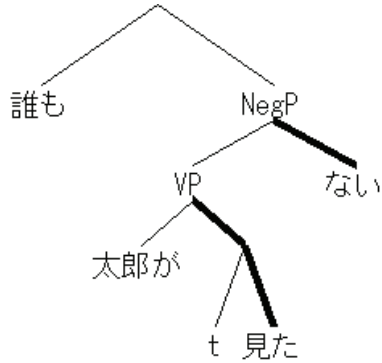
本論文では、不定語モの解釈Aのときは、不定語モが叙述関係のSubjectとなっているのに対して、不定語モの解釈Bのときは、不定語モが否定述語の項になっていると提案したい。したがって、不定語モは、(16)の可能性も(17)の可能性もある<sup>2</sup>。

<sup>2</sup> なお、片岡(2010)なども、シカと不定語モの共起した際の容認性から、不定語モがNegよりも構造的に上に位置すると主張している。

(16) 不定語モの解釈 A を派生する構造 :

a. 太郎が誰も見なかった

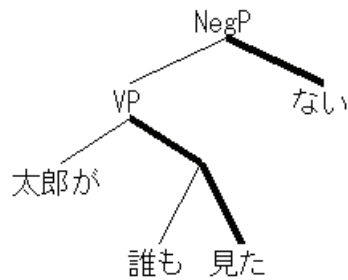
b.



(17) 不定語モの解釈 B を派生する構造 :

a. 太郎が誰も見なかった

b.



また、シカについては片岡(2006)に従い、**Negative Predicate** という用語を(18)のように定義した上で、(19)のように仮定する。片岡(2006)は、シカ句とナイが一对一の関係で、構造的には限りなく近い関係にあるとして、シカ句を含む文が、シカを **Subject** とした叙述文として解釈されるべきものであると述べている。

(18) **Negative Predicate** とは、次の(a),(b)のいずれかに該当する要素である

a. 動詞・形容詞・形容動詞・助動詞に、ナイ/マイ/ズ/ナが後続した要素<sup>3</sup>

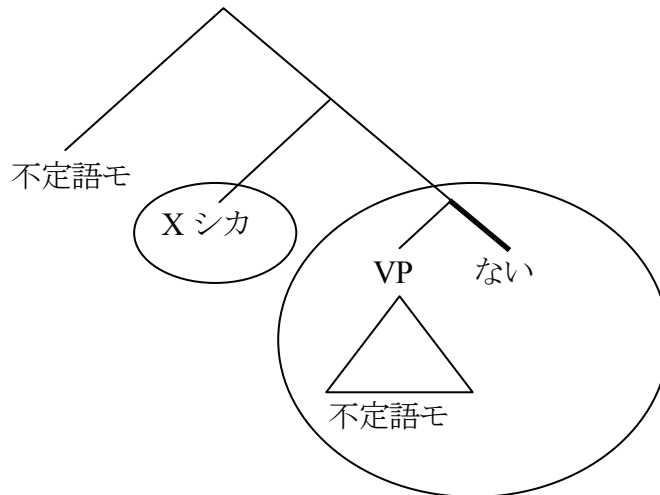
b. 形容詞ナイ

<sup>3</sup> ナイ/ズは未然形に後続し、マイは終止連体形に後続し、ナは否定命令で終止連体形に後続する。また、ズは終止連体形の場合は又またはンとなる。また、「不必要」や「無関心」など、「無～」 「不～」 「非～」などの要素は**Negative Predicate**に含まれないが、例外的に、「駄目だ」「無理だ」などは含まれる。

- (19) シカは、Negative Predicate を主要部とする句の Subject でなければならない。

語順と構造の対応については4節で論じるが、シカとモが共起した場合には(20)の二種類の構造パターンが可能であると提案したい。

- (20) 不定語モの二種類の構造的な位置：



## 2.2. Contrastive 素性

不定語モの解釈 A と不定語モの解釈 B の違いは、単独では判然としない。

- (21) a. 不定語モの解釈 A：どの人についても、太郎を見なかった。 (=16)  
b. 不定語モの解釈 B：太郎を見た人は、いない。 (=17)

1 節の(4)-(15)で解釈の違いがはっきりと出るのは、シカが共起しているためである。これについて、本論文では、上山(2010)が主張するように、シカが義務的に**Contrastive素性 (C素性)** という素性を持っており、この素性が引き起こす意味派生によって、解釈の違いが出ると思う。

C 素性は、上山(2010)で提案された。この素性は、LF から意味が派生される段階において、この素性を持つ要素から、それと対照的な意味を派生する。C 素性は通常、文脈によって任意の要素に伴う。例えば、(22a)の文は、カッコ内のような文脈があれば、「ジョンが来た」ことのほかに、「ジョン以外の人」がどうであったかを述べている(23a)の意味を持ちうる。(22b)の文も、「ジョンが来なかった」ことのほかに、「ジョン以外の人」について述べた(23b)の意味を持ちうる。

- (22) a. (みんなを映画に誘ったら、待ち合わせの時間になって、)  
 ジョンは来た
- b. (ジョンとメアリとトムに来るよう声をかけたら、)  
 ジョンは来なかった
- (23) a. (22a)が持ちうる意味：  
 ジョン以外の人で、来なかった人がいた。
- b. (22b)が持ちうる意味：  
 ジョン以外の人で、来た人がいた。

上山(2010)は、XシカはC素性を義務的に持つ要素であると提案している。本論文も同様に仮定すると<sup>4</sup>、片岡(2006)で指摘されているパラドックスを解決することができる。片岡(2006)は、シカを用いた(24a)の文は、「以外」を用いた(24b)の文と同じ意味解釈を与えうると述べている<sup>5</sup>。

- (24) a. 学生しかパソコンを買わなかった
- b. 学生以外パソコンを買わなかった

しかし、(24)のそれぞれの文に(25)のような後続文があるとき、(25a)は、容認されないとしている。

- (25) a. \*学生しかパソコンを買わなかった。学生も買わなかったけどね。
- b. 学生以外パソコンを買わなかった。学生も買わなかったけどね。

このことは、シカの場合、シカがC素性を義務的に持っているとは仮定すると説

---

<sup>4</sup> ただし、シカと不定語モの共起に注目した研究はいくつかあるが、ここでとりあげた二種類の意味の違いについては、本論文で初めて議論されることである。また、シカが何らかの談話的な素性を持つという議論については、Tanaka(1997)やMiyagawa(2005)などで焦点素性が提案されているが、C素性はその意味特性をより具体的に実現させるものである。また、C素性は焦点素性と異なり、統語的な移動などは起こらない。

<sup>5</sup> 宮地(2010)によると、シカという表現そのもののは出現はあまり古くないが、ヨリホカニなど除外を表す表現は日本語に古くからあることを示している。

- (i) ひぐらしの鳴く山里の夕暮れは風よりほかにとふ人もなし  
 ” 風以外に訪ねる人もいない [宮地 2010: p.176, (14a)]

明できる。つまり、(24a)の文の解釈は、(26a)と(26b)の両方ということになるため、(26c)が加わると矛盾が生じるのである。

- (26) a. 学生でない人は、パソコンを買わなかった。
- b. 学生がパソコンを買った。
- c. 学生がパソコンを買わなかった。

また、不定語モの解釈 B は、C 素性によって対照的な意味を派生する際、「最低 1 人誰かいる」という意味を持つ。

- (27) (トムもビルも、女の子たちに日曜のパーティの話を持ちかけていたが、) ジョンは誰も誘わなかった

- (28) (27)が持ちうる意味：

ジョン以外の人で、誰か（最低一人）を誘った人がいる。

そのため、C 素性を義務的に持つシカと不定語モが共起すると、不定語モの解釈 B の場合だけ「ダレカ」という解釈が生じ、不定語モの解釈 A との区別が明示的になるのである。

(20)の構造と、シカの意味について以上のように考えると、不定語モとシカの共起文の解釈の違いについて次のように説明できる。

不定語モがシカに先行する場合、(20)に示すように、シカや Neg のスコープの中に含まれず、不定語モの解釈 A となる。

- (4) 誰もジョンしか見なかった (SOV)
- (6) 誰もジョンしか見なかった (OSV)

したがって、(4)は、「ある人々」について、「(ある人々は) ジョンを見た、かつ、(その人々は) ジョン以外を見なかった」という叙述をしている。同様に、(6)は、「ある人々」について、「ジョンは(ある人々を) 見た、かつ、ジョン以外の人(その人々を) 見なかった」という叙述をしている。このように、(4)、(6)のいずれも、ダレモが指す「ある人々」という集団全体について何かを述べている文になる。

一方、不定語モがシカに後続する場合、シカや Neg のスコープの中に含まれてしまうため、不定語モの解釈 B となる。



- (5) ジョンしか誰も見なかった (SOV)  
 (7) ジョンしか誰も見なかった (OSV)

そのため、(5)は、「ジョン以外の人」については、「(その人々が) 見た人はいない」という叙述をしており、C 素性によって導かれる解釈としては、「ジョン」について、「誰かを見た」という叙述がなされることになる。同様に、(7)は、「ジョン以外の人」については、「(その人々を) 見た人はいない」という叙述をしており、C 素性によって導かれる解釈としては、「ジョン」について、「誰かが見た」という叙述がなされることになる。

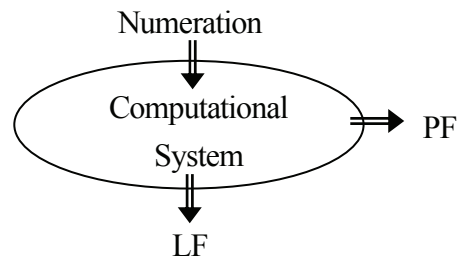
### 3. 定式化と SR

以下では上山(2008)、上山(2010)を基に、上で述べた分析をより正確に定式化する。

#### 3.1. LF と意味解釈

生成文法は、人間の頭の中に、単語を組み合わせて文を構築するメカニズムが存在するという仮説にたつ理論言語学の1つであり、次のようなメカニズムが仮定されている。

(29)



Numeration とは、いくつかの単語の集合であり、Computational System とは、その単語間に関係を構築し、全体として1つの構造を構築する計算機構である。その出力となる表示は2つある。PF は、文の音の側面の基盤となる表示であり、LF は、文の意味の側面の基盤となる表示である。

従来、LF という構築物がどのように「意味解釈の基盤」となるのかという点については、あまり具体的な議論がないまま、暗黙の了解で済まされてきた。その結果、意味解釈というものを、どのような原始概念 (primitive concept) を用いて記述するべきかということも、積極的に論じられてこなかった。そのた

め、意味解釈が深く関わる言語現象に関しては、どこまでを説明対象とするか、そして、それをどのような概念で説明するかが研究者によって様々に異なり、議論がうまくかみあわない場合も多い。この状況に対して上山(2010)は、意味（もしくは情報）というものを記号列で表し、記号列間に成り立つ推論関係が意味の理解に対応するとみなし、LF とその記号列 (SR [Semantic Representation] と呼ばれる) との対応の明示的な規則化を試みた。どのように SR を書くかということ自体は固定的なものではない。しかし、構造の構築によって何が達成されているのかを明らかにするという生成文法の目的のためには、LF と SR の対応関係を明確に意識することが重要であると考えている。上山(2010)では、この考え方に従って、対象とする現象の LF と SR に対する提案を行っている。

### 3.2. SR と指標

上山(2010)は、人が持っている知識とは、数々のモノやコトに関する情報の集積であると考えている。そこで、1つ1つの SR は、たとえば次のような形式になっている。

- (30) a.  $x_1$  : ジョン  
b.  $e_2$  : 来た & Agent ( $x_1$ )

(30a)のSRは、1 という指標で区別されるモノ ( $x_1$ ) が、「ジョン」という言語表現によって表されているということを示しており、(30b)のSRは、2 という指標で区別されるコト ( $e_2$ ) が、「来た」という言語表現によって表されており、かつ、そのAgentの意味役割をになうものが $x_1$ である、ということを示している。

知識というものをこのようにみなすと、Numeration 中の各語彙が指標をふられていると想定することによって、LF と SR の基本的な対応関係が導ける。

- (31) Numeration 中の要素は、(原則的に) 必ず指標を1つ持つ。  
(32) LFの終端記号列「 $\alpha_1$ 」は、(原則的に) 次のどちらかのSRに対応する。  
i.  $x_1$  :  $\alpha$   
ii.  $e_1$  :  $\alpha$

もちろん、LF と SR の対応規則が(32)だけならば、文の意味は、単語の意味の集まりということになってしまう。Computational System における操作によって各語彙項目の持つ特性が変化をこうむるからこそ、構造を構築する意義がある

のである。

### 3.3. LF からの SR 派生

ミニマリスト・プログラムにおいては、標準的に Merge という操作が仮定されている。

#### (33) Merge

Numeration もしくは、すでに Merge を適用してできた構築物の中から2つを選び、片方を主要部 (head) として1つの構成素にまとめる操作。

[上山 2010: p.3, (8)]

以下の樹形図では、head のほうの要素につながる branch を太線で示す。

さて、(34)のような Numeration があったとする<sup>6</sup>。以下では、議論に直接関係しないので、Numeration の段階において、「が」などの格助詞は名詞句に付加していると、便宜的に考えておく。

(34) {ジョン<sub>1</sub>が, 来た<sub>2</sub>}

この2つの要素に対して Merge が適用すると、(35)のようになる。

(35) (34)の LF :



「来た」という表現は、Agent の役割を持つ項 (argument) を取るという語彙特性を持っていると仮定していいだろう。その項構造の情報が(30)のような形で表示されるとすると、Merge という操作によって、(36)が(37)になると考えればよい。

(36) e<sub>2</sub> : 来た & Agent ( )

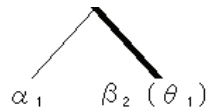
(37) e<sub>2</sub> : 来た & Agent (x<sub>1</sub>)

---

<sup>6</sup> 本来、時制要素も Numeration における独立の項目とみなすべきであるが、本論文における論点ではないため、以下では、時制要素は動詞に後接した形で表示する。

上山(2010)では、Merge に伴って、項構造の中の意味役割に対し、(38)で示しているように項となる要素の指標がふられ、それが(37)の SR 表示を生むと考えている。

(38) 項関係 1



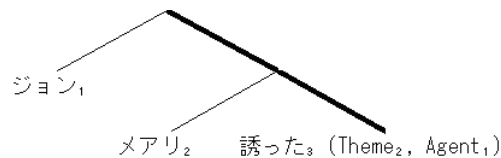
$\beta$  の項構造の中の意味役割  $\theta$  と  $\alpha$  が結び付けられ、 $\beta$  の項構造の中の  $\theta$  に  $\alpha$  の指標がつけられる。

[上山 2010: p.3, (9)]

(36)のままでは、 $e_2$  というコトは、「来た」という表現で表されるものであり、Agent が存在することは示されているが、その Agent が誰かということまでは示されていない。それに対して、(37)では、その Agent が  $x_1$  であるということまで示されている。この変化が、すなわち、Merge という操作によってもたらされたものである。

同様に、(39a)の LF には、(39b)の SR が対応する。

(39) a.



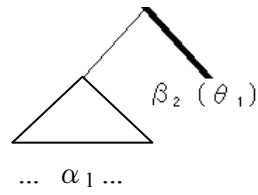
- b.  $x_1$  : ジョン  
 $x_2$  : メアリ  
 $e_3$  : 誘った & Theme( $x_2$ ) & Agent( $x_1$ )

[上山 2010: p.4, (13) (14)]

### 3.4. 項関係と叙述関係

(38)のように、項構造と結び付けられるものは、原則的に動詞と Merge する要素そのものであるが、上山(2010)では、限られた主要部の場合、(40)のように Merge する要素に含まれたもの（つまり、c 統御領域の中）から項となるものを選ぶことがあると述べている。

(40) 項関係 2



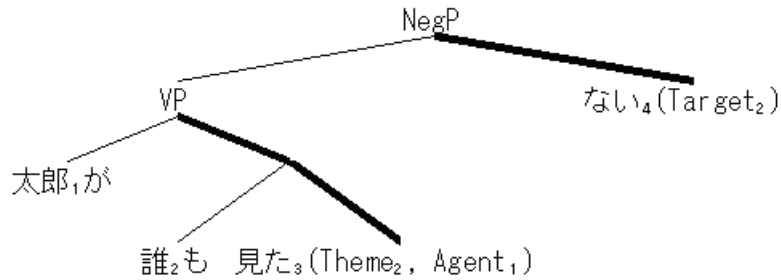
$\beta$  の項構造の中の意味役割  $\theta$  と Merge の相手の領域内に含まれる  $\alpha$  が結び付けられ、 $\beta$  の項構造の中の  $\theta$  に  $\alpha$  の指標がつけられる。ただし、このような項の取り方のできる  $\beta$  は限られている。

[上山 2010: p.4, (23)]

否定要素ナイは、この特性を持っている。不定語モの解釈 B を派生する構造を示した(17)を上山(2010)に従って書いたものが、(41)である。ナイの項構造の Target は、それと Merge した相手に含まれている「誰も」の指標と結び付けられている。これによって、「太郎が見た人」の存在が否定されるのである。

(41) a. 太郎<sub>1</sub>が誰<sub>2</sub>も見<sub>3</sub>なかった<sub>4</sub>

b.



c.  $x_1$  : 太郎

$x_2$  : 人

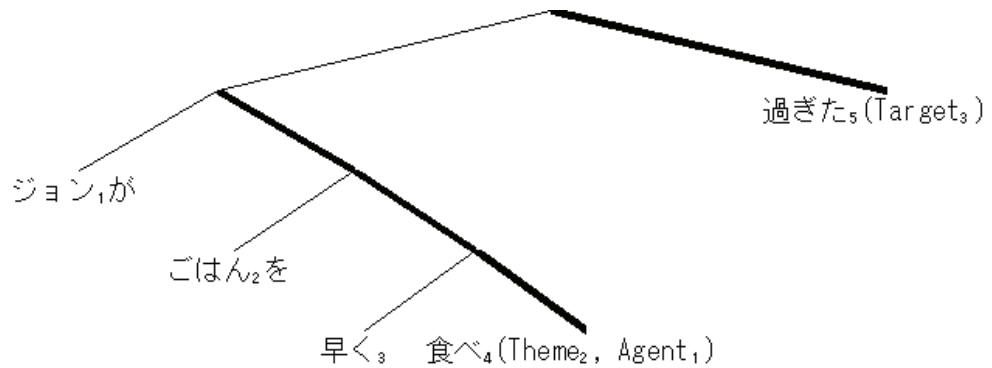
$e_3$  : 見た & Theme( $x_2$ )& Agent( $x_1$ )

$e_4$  : ない & Target( $x_2$ )

⇨ 太郎が見た人はいない

存在を意味する「ある」や、(42)の「過ぎる」、(43)のいわゆる疑問詞マーカ-の「か」なども、同様の特性を持つ。

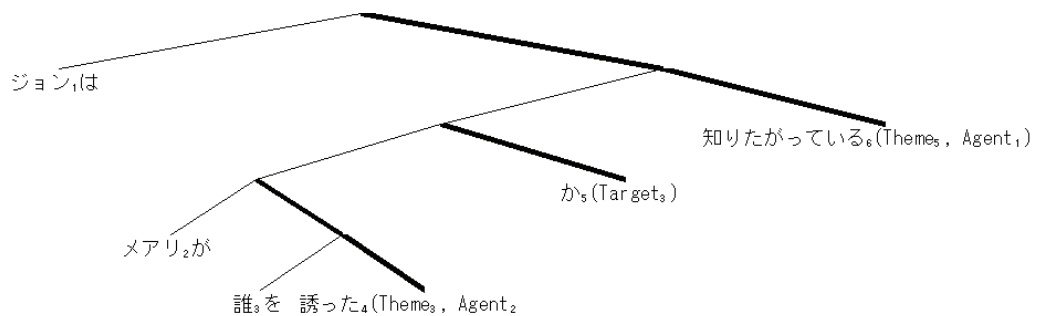
(42) a. ジョン<sub>1</sub>はごはん<sub>2</sub>を早く<sub>3</sub>食べ<sub>4</sub>過ぎた<sub>5</sub>



- b. x<sub>1</sub> : ジョン  
 x<sub>2</sub> : ごはん  
 e<sub>3</sub> : 早く  
 e<sub>4</sub> : 食べ & Theme(x<sub>2</sub>) & Agent(x<sub>1</sub>)  
 e<sub>5</sub> : 過ぎた & Target(e<sub>3</sub>)

[上山 2010: p.4, (24)]

(43) a. ジョン<sub>1</sub>は[メアリ<sub>2</sub>が誰<sub>3</sub>を誘った<sub>4</sub>か<sub>5</sub>]知りたがっている<sub>6</sub>



- b. x<sub>1</sub> : ジョン  
 x<sub>2</sub> : メアリ  
 x<sub>3</sub> : 人  
 e<sub>4</sub> : 誘った & Theme(x<sub>3</sub>) & Agent(x<sub>2</sub>)  
 e<sub>5</sub> : Q & Target(x<sub>3</sub>)  
 e<sub>6</sub> : 知りたがっている & Theme(e<sub>5</sub>) & Agent(x<sub>1</sub>)

[上山 2010: p.4, (25)]

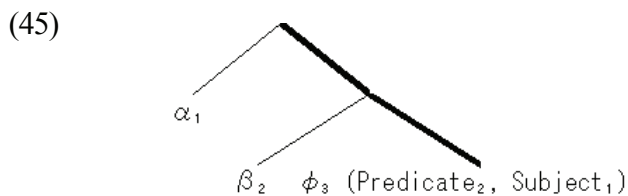
(42)の「過ぎる」の項構造の Target は、それと Merge した相手に含まれている「早く」の指標と結び付けられている。(43)の「か」も同様に、それが持つ Target

が結びついている要素は「誰を」である。

また、日本語では、(44)の下線部を引いている名詞句のように、述語との間に項関係ではなく、いわゆる「叙述関係」が成り立っていると考えられる文があることが知られている。

- (44) a. 象は鼻が長い。  
b. 物理学は就職が大変だ。

項でない要素も叙述関係さえ成り立てばMergeの対象になりうると考えられる。そこで、それ自身の意味内容はなく、(Predicate, Subject)という項構造のみを持つ要素があると仮定したい。この要素と  $\beta_2$ ,  $\alpha_1$  がMergeすると、次のような構造が生まれる。



[上山 2010: p.8, (54)]

この構造と対応する SR は、たとえば次のようになる。

(46) (45)に対応する SR

- $x_1$  :  $\alpha$   
 $e_2$  :  $\beta$   
 $e_3$  : Subject ( $x_1$ ) & Predicate( $e_2$ )

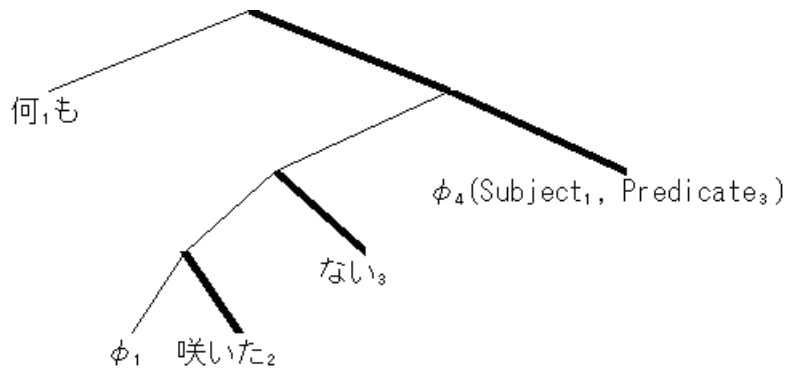
[上山 2010: p.8, (55)]

$e_3$  は、言語表現によって表されているコトではなく、単にSubjectとPredicateという役割だけを述べているコトである。この $e_3$ のようなコトを、以下では「叙述関係」と呼ぶことにする。

以上のことを仮定すると、不定語モの解釈 A を派生する構造は、(47)のように考えられる。

- (47) a. (パンジーとデイジーとコスモスの種を植えてみたが、) [何<sub>1</sub>も咲か<sub>2</sub>なかつた<sub>3</sub>]<sub>4</sub>

b.

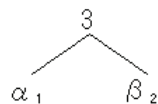


- c.  $x_1$  : もの  
 $e_2$  : 咲く & Agent( $x_1$ )  
 $e_3$  : ない & Target( $e_2$ )  
 $e_4$  : Subject( $x_1$ ) & Predicate( $e_3$ )  
 $\equiv$  どのモノも、咲かなかった

### 3.5. LF-T 移動

叙述関係の Subject になるということに関しては、不定語モの解釈 A を派生する構造にもシカにもあてはまる。しかし、常に基底生成するとは限らず、Merge の段階では、項構造を形成しておきつつ、LF における移動操作によって叙述関係が形成される場合もあるだろう。LF で叙述関係を構築する移動操作として、LF-T 移動というものを提案する。これは、ある意味では、従来、QR (Quantifier Raising) と呼ばれてきた操作に対応するものである。β に含まれる要素 α が、Numeration において T 素性を持っていた場合、移動によって(48)のような構造が形成され、この構造が、(46)のような SR を派生すると仮定する。以下、この移動を LF-T 移動と呼ぶことにする。(49a)で T 素性を持っているダレモは、LF-T 移動をし、(49c)の構造が形成される。叙述関係を形成するためには指標が必要なので、T 素性自体も指標を持っている。

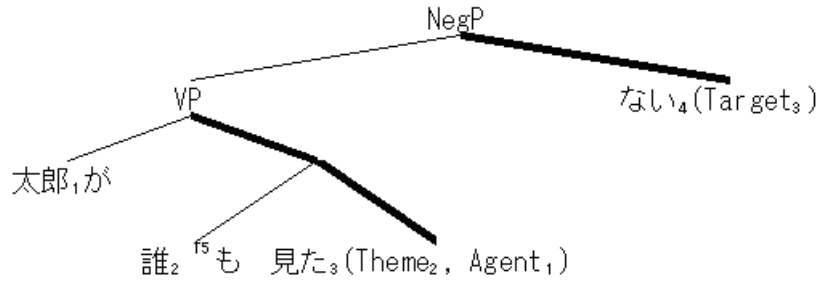
(48) LF-T 移動によって構築される叙述関係



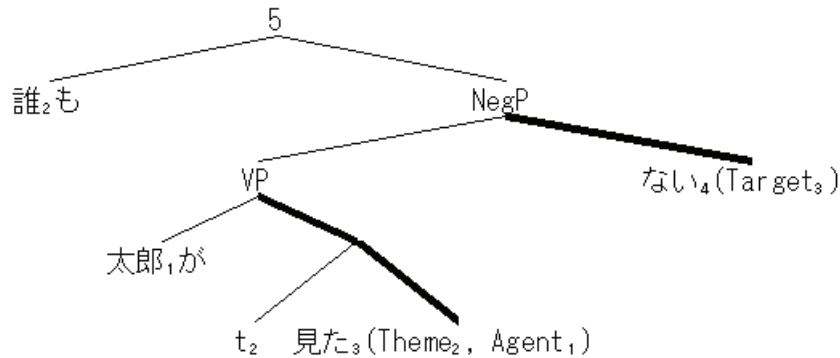
(49) a. 太郎<sub>1</sub>が誰<sub>2</sub><sup>T5</sup>も見<sub>3</sub>なかった<sub>4</sub>



b. LF-T 移動前の LF :



c. LF-T 移動後の LF :



d.  $x_1$  : 太郎

$x_2$  : 人

$e_3$  : 見た & Theme( $x_2$ ) & Agent( $x_1$ )

$e_4$  : ない & Target( $e_3$ )

$e_5$  : Subject( $x_2$ ) & Predicate( $e_4$ )

≡ どの人についても、太郎は見なかった

移動前 (上の(b)) の「誰も」は「見た」の項であるが、移動後 (上の(c)) には、「太郎が  $t$  見た」に対する Subject になっている。つまり、ある要素 X が叙述関係の Subject となるケースは、次の 2 通りあることになる。

(50) ある要素 X が叙述関係の Subject となるのは、(a)か(b)のいずれかの場合である :

a. X が Subject 位置に基底生成する

b. X が numeration の段階で T 素性を持ち、LF-T 移動をする

しかし、LF移動を仮定すると、不定語モの解釈Aと不定語モの解釈Bの違いを生む要因である、表層語順とずれてしまう可能性がある。そこで、私たちが何

かの文  $\alpha$  を理解する際、その  $\alpha$  を解析して Numeration を形成すると考え、その際に(51)のような原則が働いているとする<sup>7</sup>。そう考えると、(52)の規則を定めることによって、表層語順との関連性が維持される。

(51) 指標は音連鎖にしたがって、順番につけられる

(52) 次の場合、 $n < m$  でなければならない

a.  $x_n$  を subject とする Predicate の中に、Subject である  $x_m$  が含まれている

b. (a) を式に表したもの：

$e_p : \text{Subject}(x_n) \ \& \ \text{Predicate}(e_q)$

$e_q : \text{Subject}(x_m) \ \& \ \dots$

### 3.6. C 素性

次に、具体的にどのように C 素性がはたらくのか、(22b)に指標を示した(53)を例にとって考える。

(53) (ジョンとメアリとトムに来るよう声をかけたら、) ジョン<sub>1</sub>は来なかった<sub>2</sub>

(54) (53)が持ちうる意味：

ジョン以外の人で、来た人がいた。

(53)の文において、(54)の意味をもつ場合、来たのがジョン以外の全員か、一人来ただけか、まではわからない。しかしいずれにせよ、「ジョン以外の誰かが(最低一人)来た」ことには変わらない。つまり、(53)からは、「ジョンが来なかった」という、構造に直接対応する SR (linguistic SR) のほかに、(55)のような SR が派生されれば、(54)の意味をもつことができる。

(55) (53)において派生したい SR：

$x_n$ :  $\neg$ ジョン

$e_m$ : 来た & Agent ( $x_n$ )

そこで、C 素性は(56)の SR 操作を促すと仮定する。その中で言及されている include という概念の定義は(57)のとおりである。

---

<sup>7</sup> このような文理解のモデルの詳細については、Ueyama (2010)を参照してほしい。

(56) Contrastive 素性による SR の派生方法

- 1)  $x_n^c : \alpha$  があれば、新たに「 $x_{nC} : \neg\alpha$ 」を作る。
- 2) 1)の $x_n$ をincludeしているSR式に対して、それぞれ対応する対照物に置き換えていく<sup>8</sup>。
- 3) 2)の操作を続け、次の対応表のa ~ cのいずれかの派生で終了する<sup>9</sup>。

	linguistic SR	→	派生される SR
a.	$e_p : \alpha$		$e_{pC} : \alpha$ $e_{pCN} : \text{ない} \ \& \ \text{Target}(e_{pC})$
b.	$e_p : \alpha$ $e_q : \text{ない} \ \& \ \text{Target}(e_p)$		$e_{pC} : \alpha$ $e_{qC} : \text{ある} \ \& \ \text{Target}(e_{pC})$
c.	$x_p : \alpha$ $e_q : \text{ない} \ \& \ \text{Target}(x_p)$		$x_{pC} : \alpha$ $e_{qC} : \text{ある} \ \& \ \text{Target}(x_{pC})$

(57) include :

- (i)  $\alpha$ が持つ指標をa、 $\beta$ が持つ指標をbとした場合、 $x/e_b : \dots x/e_a \dots$ ならば、 $\beta$ が $\alpha$ をincludeする。  
そして、
- (ii)  $\gamma$ が $\alpha$ をincludeし、 $\beta$ が $\gamma$ をincludeするならば、 $\beta$ も $\alpha$ をincludeする。

(53)は linguistic SR にナイを含むので、(56)の表中の(b)が適用される。

<sup>8</sup> この派生を行う領域中に、T素性を持っていない不定語+モ ( $x_n : \alpha$ ) が含まれている場合、派生されるSRの対応する位置に「 $x_{nC} : \alpha$ 」を導入することとする。

<sup>9</sup> 例えば、linguistic SRがa.の左欄の「 $e_p : \alpha$ 」なら、派生されるSRとして対応するのは、同段右欄の「 $e_{pC} : \alpha$ 、 $e_{pCN} : \text{ない} \ \& \ \text{Target}(e_{pC})$ 」となる。

- (58) a. ジョン<sub>1</sub><sup>C</sup>は来<sub>2</sub>なかつた<sub>3</sub>  
 b. (a)の LF :



- c. (56)の操作が終わると派生される SR :

linguistic SR	派生される SR
$x_1$ : ジョン	$x_{1C}$ : $\neg$ ジョン
$e_2$ : 来た & Agent( $x_1$ )	$e_{2C}$ : 来た & Agent( $x_{1C}$ )
$e_3$ : ない & Target( $e_2$ )	$e_{3C}$ : ある & Target( $e_{2C}$ )

(58c)によって表されているのは、「ジョンが来る、というコトがなかつた (= ジョンが来なかつた)」そして「ジョン以外の人が来た、というコトがあつた (= ジョン以外の人が来た)」という意味内容である。

### 3.7. シカ

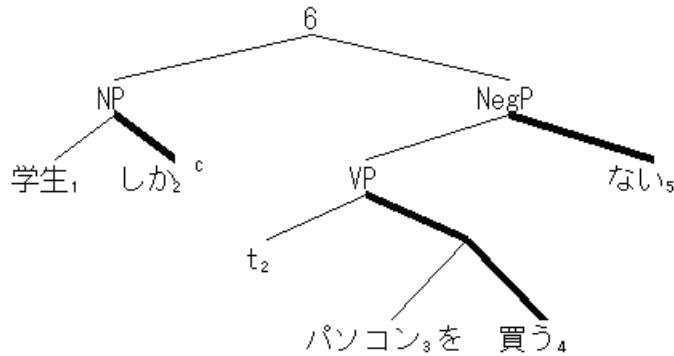
では、C 素性を義務的に持つシカの SR の派生を説明する。(24)から、シカそのものは「以外」と似た意味を持つと考える。X シカという表現は、以下のよ  
うに、「X 以外のモノ」を表すと仮定する。

- (59) a.  $\alpha_m$ シカ<sub>n</sub>  
 b.  $x_m$  :  $\alpha$   
 $x_n$  :  $\neg(x_m)$

シカの語彙特性は(60)であり、(61a)は(61b)の構造から、(61c)の SR を派生する。

- (60) シカは Negative Predicate の Subject にならなければならない。かつ、シカは C 素性を持たなければならない。

- (61) a. [学生<sub>1</sub>しか<sub>2</sub><sup>C</sup>パソコン<sub>3</sub>を買わ<sub>4</sub>ない<sub>5</sub>]<sub>6</sub>  
 b. (a)のLF



c.

linguistic SR	派生される SR
$x_1$ : 学生	
$x_2$ : $\neg(x_1)$	$x_{2C}$ : $x_1$
$x_3$ : パソコン	
$e_4$ : 買う & Theme( $x_3$ ) & Agent( $x_2$ )	$e_{4C}$ : 買う & Theme( $x_3$ ) & Agent( $x_{2C}$ )
$e_5$ : ない & Target( $e_4$ )	$e_{5C}$ : ある & Target( $e_{4C}$ )
$e_6$ : Subject( $x_2$ ) & Predicate( $e_5$ )	

(61c)の linguistic SR は、「学生以外の人には、パソコンを買わなかった」という表示であり、派生される SR は、「学生がパソコンを買う」という表示である。

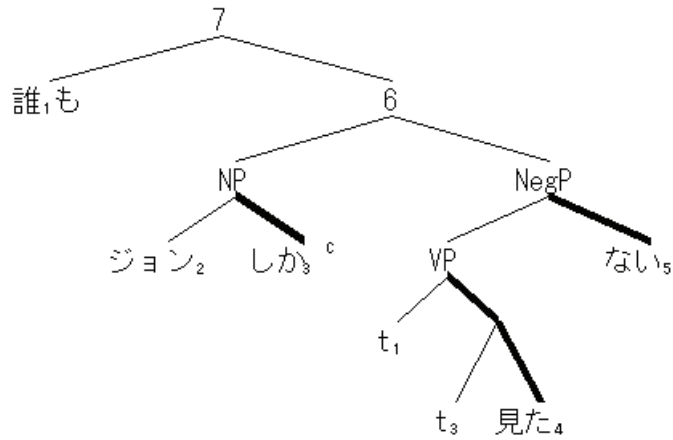
#### 4. 不定語モとシカの分析

##### 4.1. SOV 語順の共起文

以上より、不定語モの解釈 A となる(4)は(62b)の構造になっていると考える。

- (4) 誰もジョンしか見なかった (SOV)  
 ⇨ どの人も、ジョン以外の人ことは見ていない、かつ、どの人も、ジョンのことは見た

- (62) a. 誰<sub>1</sub><sup>T7</sup>もジョン<sub>2</sub><sup>T6</sup>しか<sub>3</sub>見<sub>4</sub>なかつた<sub>5</sub> (SOV)  
 b. LF :



c.

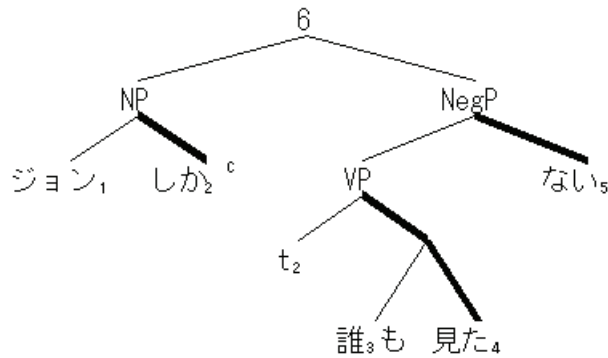
linguistic SR	派生される SR
$x_1$ : 人	
$x_2$ : ジョン	
$x_3$ : $\neg(x_2)$	$x_{3C}$ : $x_2$
$e_4$ : 見た & Theme( $x_3$ ) & Agent( $x_1$ )	$e_{4C}$ : 見た & Theme( $x_{3C}$ ) & Agent( $x_1$ )
$e_5$ : ない & Target( $e_4$ )	$e_{5C}$ : ある & Target( $e_{4C}$ )
$e_6$ : Subject ( $x_3$ ) & Predicate( $e_5$ )	
$e_7$ : Subject ( $x_1$ ) & Predicate( $e_6$ )	

(62c)の linguistic SR は、「どの人についても、ジョン以外の人を見なかった」という表示であり、派生される SR は、「どの人も、ジョンのことを見た」という表示であり、現象に合致している。

- (5) ジョンしか誰も見なかった (SOV)  
 ≡ジョン以外の人が見た人はいない、かつ、ジョンが誰かのことは見た

(63) a. ジョン<sub>1</sub>しか<sub>2</sub><sup>T6</sup>誰<sub>3</sub>も見<sub>4</sub>なかつた<sub>5</sub> (SOV) (=5)

b.



c.

linguistic SR	派生される SR
x <sub>1</sub> : ジョン	
x <sub>2</sub> : ¬(x <sub>1</sub> )	x <sub>2C</sub> : x <sub>1</sub>
x <sub>3</sub> : 人	x <sub>3C</sub> : 人
e <sub>4</sub> : 見た & Theme(x <sub>3</sub> ) & Agent(x <sub>2</sub> ) e <sub>5</sub> : ない & Target(x <sub>3</sub> )	e <sub>4C</sub> : 見た & Theme(x <sub>3C</sub> ) & Agent(x <sub>2C</sub> ) e <sub>5C</sub> : ある & Target(x <sub>3C</sub> )
e <sub>6</sub> : Subject (x <sub>2</sub> ) & Predicate(e <sub>5</sub> )	

(63c)の linguistic SR は、「ジョン以外の人が見た人はいない」という表示であり、派生される SR は、「ジョンが見た人がいる」という表示である。こちらも、実際の意味に合致している。

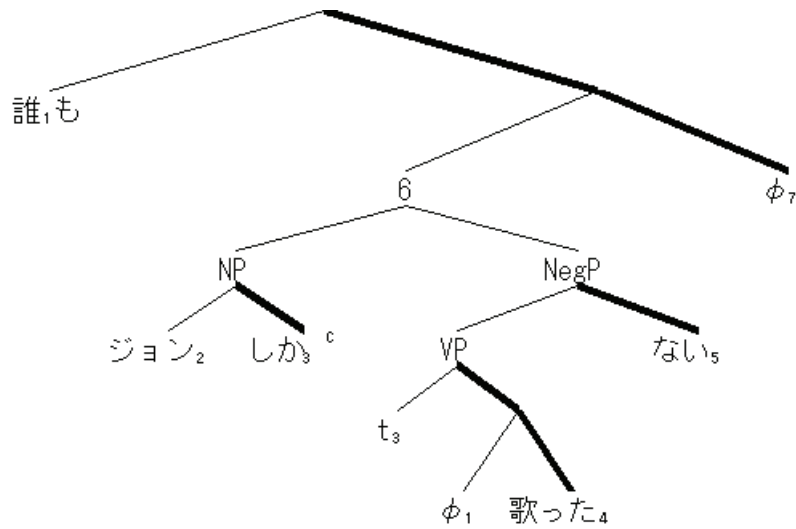
#### 4.2. OSV 語順の共起文

OSV 文の場合、OSV 語順で基底生成されているとすると、(52)に違反せず、かつ、実際の解釈と合致した SR が派生される。

(6) 誰もジョンしか見なかつた (OSV)  
 ≡ジョン以外の人が見た人はいない、かつ、ジョンは、どの人のことも見た

(64) a. [誰<sub>1</sub>もジョン<sub>2</sub>しか<sub>3</sub><sup>T6,C</sup>見<sub>4</sub>なかつた<sub>5</sub>]<sub>7</sub> (OSV)

b. LF :



c.

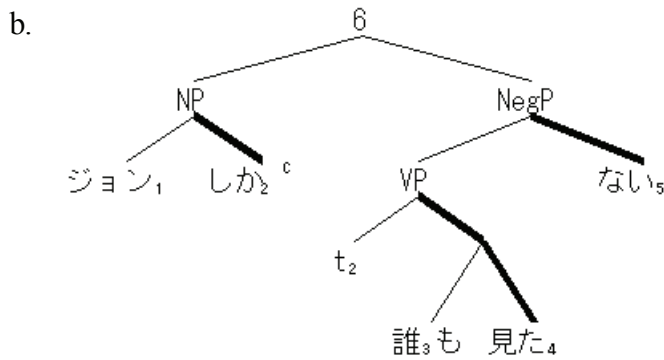
linguistic SR	派生される SR
$x_1$ : 人	
$x_2$ : ジョン	
$x_3$ : $\neg(x_2)$	$x_{3C}$ : $x_2$
$e_4$ : 見た & Theme( $x_1$ ) & Agent( $x_3$ ) $e_5$ : ない & Target( $e_4$ )	$e_{4C}$ : 見た & Theme( $x_1$ ) & Agent( $x_{3C}$ ) $e_{5C}$ : ある & Target( $e_{4C}$ )
$e_6$ : Subject ( $x_3$ ) & Predicate( $e_5$ )	
$e_7$ : Subject ( $x_1$ ) & Predicate( $e_6$ )	

(64c)の linguistic SR は、「どの人についても、ジョンではない人に叱られていない」ことを表し、派生される SR は、「ジョンがみんなを見た」ことを表す。  
 (65c)の linguistic SR は、「ジョンではない人が叱った人はいない」ことを表し、派生される SR は「ジョンが見た人がいる」ことを表す。

(7) ジョンしか誰も見なかった (OSV)  
 ⇨ ジョン以外の人を見た人はいない、かつ、誰かがジョンのことは見た

(65) a. [ジョン<sub>1</sub>しか<sub>2</sub>誰も見<sub>4</sub>なかった<sub>5</sub>]<sub>6</sub> (OSV)





c.

linguistic SR	派生される SR
$x_1$ : ジョン	
$x_2$ : $\neg(x_1)$	$x_{2C}$ : $x_1$
$x_3$ : 人	$x_{3C}$ : 人
$e_4$ : 見た & Theme( $x_2$ )& Agent( $x_3$ ) $e_5$ : ない & Target ( $x_3$ )	$e_{4C}$ : 見た& Theme( $x_{2C}$ )& Agent( $x_{3C}$ ) $e_{5C}$ : ある& Target( $x_{3C}$ )
$e_6$ : Subject( $x_2$ ) & Predicate( $e_5$ )	

OS 型構文が、OSV 語順で基底生成されるということがありうるか否かについては、Ueyama (1998)で論じられている。

OS 型構文には、LF において、主語 NP が目的語 NP を c 統御していると考えられる現象と、目的語 NP が主語 NP を c 統御していると考えられる現象がある。この現象については、目的語 NP の基底生成位置について VP (vP)内の  $\theta$  位置で基底生成され、移動によって OS 文が生じると言われてきた。しかし、Ueyama (1998)では、OS 文は移動によるものと、移動によらないものの二種類があると主張している。

Ueyama (1998)では、OS 型構文を、Surface OS-type と、Deep OS-type の二種類にわけ、OS 文には(66)と(67)の二種類の構造があるとした。

(66) Surface OS-type

- a. PF : NP-ヲ/-ニ NP-ガ V
- b. LF : NP-ガ NP-ヲ/-ニ V

(67) Deep OS-type

- a. PF : NP-ヲ/-ニ NP-ガ V

b. LF : NP-ヲ/-ニ NP-ガ V

Surface OS のヲ格または二格 NP を Surface DL、Deep OS のヲ格または二格 NP を Deep DL と呼ぶ。Surface DL は  $\theta$  位置に基底生成され、PF 移動によって OS 文となる。一方、Deep DL は文頭に基底生成する。

(68)は、「トヨタ」と「そこ」の同一指示解釈が可能な例である。このことから、ヲ格 NP がガ格 NP を c 統御していると考えられる。一方、(69a)も、「トヨタ」と「そこ」の同一指示解釈が可能であり、こちらはガ格 NP がヲ格 NP を c 統御していると考えられる。(69b)は、文頭のヲ格 NP を間接疑問文の要素として解釈することが可能である。このことから、ヲ格 NP は「か」の c 統御領域にあり、CP の中でガ格 NP がヲ格 NP を c 統御していると考えられる。

(68) Deep OS と考えることにより説明できる現象 :

トヨタさえを [そこを敵対視している会社]が訴えた

[Ueyama 1998: p.8, (16)]

cf. \*[そこを敵対視している会社]が トヨタさえを訴えた

[Ueyama 1998: p.7, (12)]

(69) Surface OS と考えることにより説明できる現象 :

a. [その子会社]を トヨタさえが推薦した

[Ueyama 1998: p.1, (24)]

b. ?どの本を まさおが [<sub>CP</sub>花子が  $t_i$  図書館から借り出したか] 知っていた  
がっている (こと)

[Ueyama 1998: p.13, (32a)]

Ueyama (1998)では、Deep OS においては、 $\theta$  位置から空演算子が DL の近くに移動してくることによって、DL と  $\theta$  位置の間に統語的關係が築かれると述べている。

(70) Deep OS の LF における空演算子の移動 :

[NP-ヲ/-ニ [<sub>Op</sub> [NP-ガ  $t$  V]]

構造と語順の關係には様々な議論があり、本稿でもそれを明らかにすることはできていない。ただ、事実として、不定語モとシカの OSV 文において、Surface OS の解釈が観察されにくいということがある。これが、文法的に容認性が低

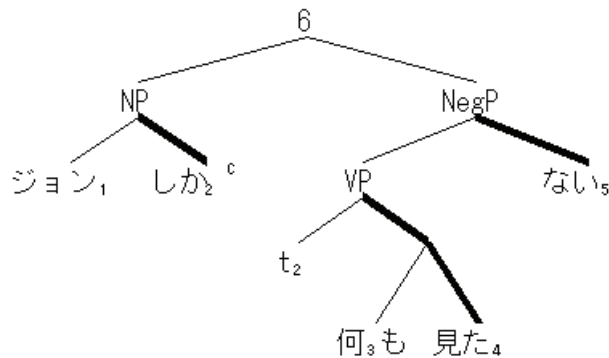
いのか、Deep OS で解釈する傾向が強いただけであるのかということは、今後の課題とする。

### 4.3. ナニモとシカの共起

ナニモとシカの共起文について、解釈に一定の傾向が見られる(9)、(10)のLFは、それぞれ(71b)、(72b)であると考えられる。

- (9) ジョンしか何も見なかった (SOV)  
 ≡ジョン以外の人が見たものはない、かつ、ジョンが何かは見た

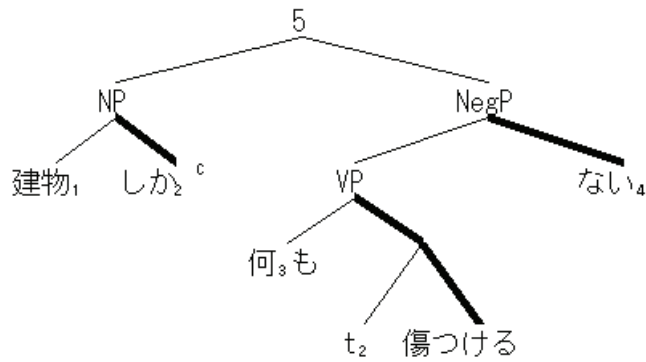
- (71) a. ジョン<sub>1</sub>しか<sub>2</sub><sup>T6,C</sup>何<sub>3</sub>も見<sub>4</sub>なかった<sub>5</sub> (SOV)  
 b. LF :



- (10) (大規模な爆発で、倉庫内にあったものが四方に飛んだが、)  
 建物しか何も傷つけなかった (OSV)  
 ≡建物以外のものを傷つけたものはない、かつ、何かは建物を傷つけた

- (72) a. 建物<sub>1</sub>しか<sub>2</sub>何<sub>3</sub>も傷つけ<sub>4</sub>なかった<sub>5</sub> (OSV)

b. LF :



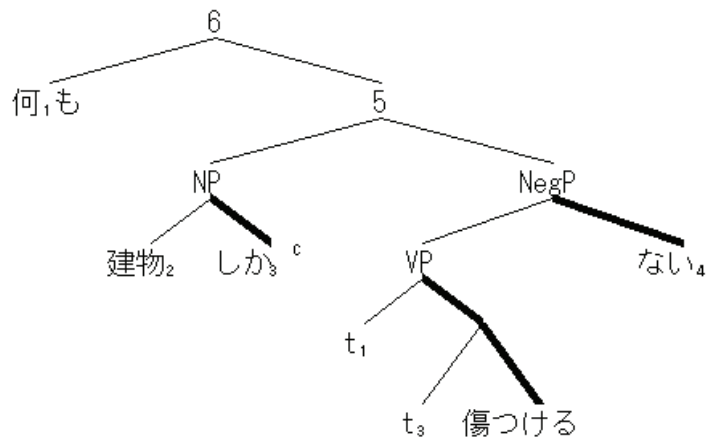
一方、解釈が定まりにくい(11)には(73), (74)、(13)には(75), (76)の二通りの LF が考えられる。

(11) (大規模な爆発で、倉庫内にあったものが四方に飛んだが、)  
?何も建物しか傷つけなかった (SOV)

(73) 不定語モの解釈 A を派生する構造 :

a. 何<sub>1</sub><sup>T6</sup>も建物<sub>2</sub>しか<sub>3</sub><sup>T5,C</sup>傷つけ<sub>3</sub>なかった<sub>4</sub>

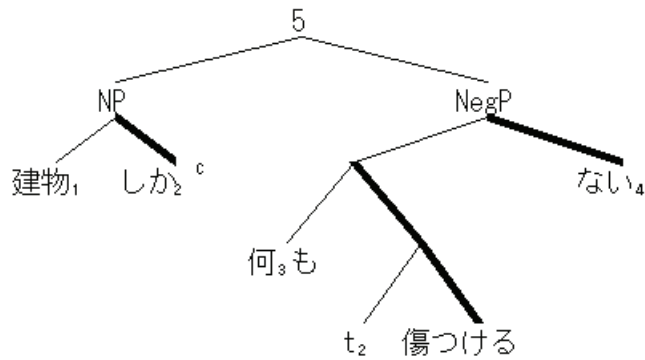
b. LF :



(74) 不定語モの解釈 B を派生する構造 :

a. 何<sub>1</sub>も建物<sub>2</sub>しか<sub>3</sub><sup>T5,C</sup>傷つけ<sub>3</sub>なかった<sub>4</sub>

b. LF



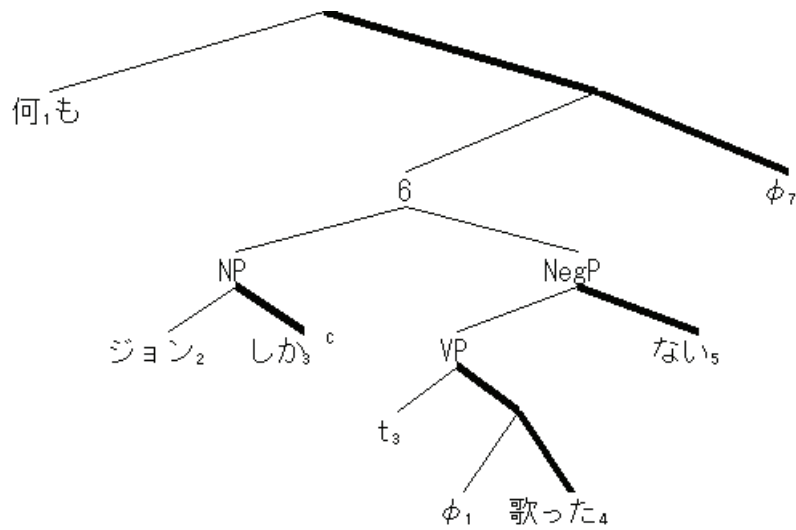
OSV 語順である(13)は、不定語モの解釈 A の場合には Deep OS であり、不定語モの解釈 B の場合には Surface OS 文であるということになる。

(13) ?何もジョンしか見なかった (OSV)

(75) 不定語モの解釈 A を派生する構造：

a. [何も1ジョン2<sup>T6,C</sup>しか3見4なかった5]7

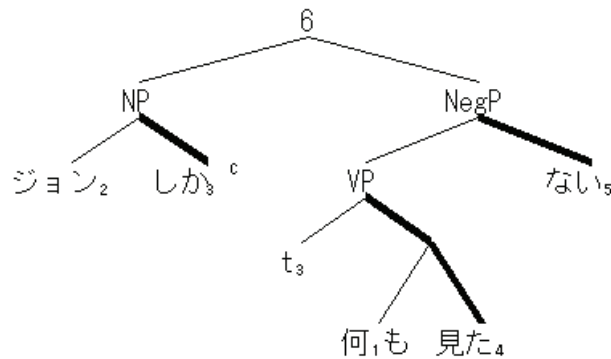
b.



(76) 不定語モの解釈 B を派生する構造：

a. 何も1ジョン2<sup>T6,C</sup>しか3見4なかった5

b.



ダレモとシカの共起文の場合、その意味役割に関係なく、シカに先行するダレモが不定語モの解釈 A になる傾向は極めて強い。一方、ナニモはダレモに比べて、シカに先行している場合でも、不定語モの解釈 A になる傾向が強いとは言えない。

これは、何らかの要因によって、ダレモに比べてナニモという語彙の特定性 (specificity) が低いことが原因であると考えられる。特定性の低いものについて叙述することは困難であるためである。

## 5. まとめと残る課題

本論文では、不定語モそのものの語義は1つであるが、それが生起する2種類の統語的位置によって2種類の解釈が派生するということを主張した。その違いは、特に(60)のような特性を持つ語シカとの共起文を観察すると、はっきりとわかる。

- (60) シカは Negative Predicate の Subject にならなければならない。かつ、シカは C 素性を持たなければならない。

不定語モとシカが共起したとき、叙述関係の Subject となっている不定語モは、シカより構造的に上の位置にあり、C 素性の影響を受けない。その結果、「全員/全てのモノ」という意味解釈になる。しかし、Neg の c 統御領域にある不定語モは、C 素性の影響を受け、「誰かは/何かは」という意味解釈になる。叙述関係の Subject となっている不定語モと、Neg の Target になっている不定語モは、それだけではその違いは明示的ではない。しかし、その位置が C 素性の影響を受ける位置か否かによって、不定語モが「全員/全てのモノ」という意味を持つか、「誰かは/何かは」という意味を持つか、という明示的な違いが

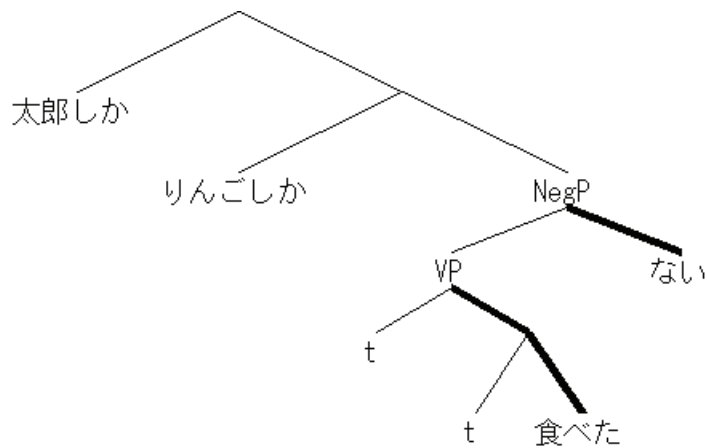
出る。本論文では、不定語モがシカに先行する場合は、必ず「全員／全てのモノ」という解釈になり、シカが不定語モに先行する場合は、必ず「誰かは／何かは」という解釈になるということを示した。

また、(60)は、朴(2007b)で引用されているシカとシカの共起文の、容認性の低さも説明することが可能である。(77)は、シカが1つのナイに対して2つあると、シカが(60)に違反するということで説明できる。ナイが1つしかない以上、(78)のように、2つのシカ句がそれと叙述関係を結べるはずがないからである。

(77) \*太郎しかりんごしか食べなかった

[朴 2007b: p.82, (4a)<sup>10</sup>]

(78)



朴(2007b)は、(79)の主張によって、ダレモ／ナニモ／シカの共起制限を説明している。

(79) シカや不定語モが単一否定辞のもとで共起するためには、付加部位置に現れなければならない

朴(2007b)は、ダレモ／ナニモとシカの共起についても(79)の主張に基づいて分析している。朴(2007b)では、Kawashima & Kitahara (1992)などに従い、ダレモ／ナニモは常に付加部であると考えられる。(80a)は(80b)のように、(81a)は(81b)のように、項位置にあるのは pro である。

<sup>10</sup> 容認性の判断は、引用元であるAoyagi & Ishii(1994)による。

- (80) a. 学生が誰も車を買わなかった  
b. pro 誰も車を買わなかった [朴 2007b: p.84, (9a) (10a)]

- (81) a. 学生が飲み物を何も買わなかった  
b. 学生が pro 何も買わなかった [朴 2007b: p.84, (9b) (10b)]

一方、シカ句は項位置にも付加部位置にも現れる。このため、シカ句が双方項位置にある(77)や、シカ句が項位置にある(82)は、容認性が低い例としてあげられている<sup>11</sup>。朴(2007a)においても、(82)は、容認性の低い例としてあげられた。

- (82) \*誰も「Aspects」しか読まなかった [朴 2007b: p.83, (6)]

しかし、(82)の文は、「Aspects 以外の本を読んだ人はいない、かつ、どの人のも、Aspects は読んだ」という解釈が可能である。つまり、不定語モの解釈 A が可能ということになる。(82)を容認性の低いものとしてあげているということは、ダレモを $\theta$ 位置で解釈する傾向、つまり、不定語モの解釈 B となる傾向が話者個人として強い可能性がある。

話者によって、不定語モの解釈 A、不定語モの解釈 B、どちらで解釈するかということについて一定の傾向があることは、片岡(2010)の容認性からも伺える。片岡(2010)は、ダレモとシカの共起文について(83)のように容認性を判断している。これは、不定語モについて、不定語モの解釈 A で解釈する傾向が強いと考えられる。

- (83) a. (先生が) だれも花子しか推薦しない  
b. \*山田先生しか (学生を) だれも推薦しない  
[片岡 2010: p.127, (27a) (27b)]

また、本論文であげた現象は、Watanabe(2004)の主張するダレモ／ナニモの特性の問題点を浮き彫りにする。Watanabe(2004)は、ダレモ／ナニモについて、(84b)のような、省略回答が可能であるということに注目している。

- (84) a. 何を見たの？  
b. 何も見なかった [Watanabe 2004: p.584, (31)]

---

<sup>11</sup> 容認性判断は、Kato (1985)による。



(85) 意味的に等価な先行詞が存在すれば省略が認可される

(Merchant 2001)

Watanabe (2004)は(85)を前提として、(84b)で、否定の意味を担っているのは、否定辞ではなくダレモ／ナニモであると主張している。Watanabe (2004)では、ダレモ／ナニモも否定辞自体も否定素性[neg]を持つとし、否定素性間での照合の際、ダレモ／ナニモの否定素性が否定辞にコピーされると主張されている。素性照合の結果、否定辞は否定素性を2つ持つことになり、意味上、肯定と等価になる。(86)の、否定辞部分の[neg][neg]が、意味上、肯定と等価になるということである。

(86) Watanabe (2004)における neg のコピー：



これによって、(85)を前提とした、(84)の省略回答が可能になると Watanabe (2004)は述べている。

しかし、(86)のような素性のコピーによって、否定辞が否定としての機能を失うとすれば、ダレモ／ナニモとシカは共起できない可能性がある。シカは否定辞との共起を必須とし、意味上でも否定辞が持つ否定としての機能は意味上重要な役割をはたす。しかし、本論文で見てきたように、実際にはダレモとシカは共起可能な場合がほとんどであり、ナニモとシカの共起文も容認性の高い例が多く存在する。Watanabe (2004)は、シカとの共起した際の素性照合についてなどは分析していないが、分析を要する重要な点であると言える。

本論文における課題としては、まず、シカの、義務的にC素性を持つという語彙特性を明らかにできていないことがあげられる。シカが叙述関係のSubjectになるという統語的な位置がC素性をもたらすのか、シカの何らかの特異性がそうさせるのかは、今後検討しなければならない。

また、不定語モがシカに先行する場合の共起文についても、問題が残る。ダレモがシカに先行する場合、ダレモの統語的な位置は、不定語モの解釈Aを派生する位置でも、不定語モの解釈Bを派生する位置でも、(52)には抵触しない。しかし、解釈としては、不定語モの解釈Aになる傾向がきわめて高い。

(52) 次の場合、 $n < m$  でなければならない

- a.  $x_n$ をsubjectとするPredicateの中に、Subjectである $x_m$ が含まれている
- b. (a)を式に表したもの：  
 $e_p$  : Subject( $x_n$ ) & Predicate( $e_q$ )  
 $e_q$  : Subject( $x_m$ ) & ...

一方、ナニモがシカに先行する場合は、不定語モの解釈 A と不定語モの解釈 B の間に、ダレモとシカの共起文ほどの差はない。ナニモの特定性 (specificity) の低さが何に起因するのかということをはっきりとできていないこととも関連するが、これらの差は今後明らかにすべき問題である。

### 謝辞

本稿は、2011年1月に提出した修士論文「ダレモ／ナニモ／シカの構造と解釈」の内容に、加筆、修正を施したものです。厚くご指導して下さった九州大学の上山あゆみ先生をはじめ、稲田俊明先生、坂本勉先生、久保智之先生に、心から感謝を申し上げます。また、匿名査読者二名からも貴重なコメントを頂き、感謝の念が絶えません。そして、言語学研究室の大学院生の方々、特に、同期として忌憚ない意見をよせて下さった備瀬優、池田則之、吉田麻衣子の三氏と、修士論文執筆にあたりお力を貸して下さった高井岩生氏に、深く感謝いたします。

当然ながら、本稿における一切の不備や誤りの責任は筆者にあります。

### 参考文献

- 上山あゆみ (2008) 「文理解システム構築を目指して」, 『文理解システムの実用化を目指した基礎的研究』平成 19 年度 九州大学教育研究プログラム研究拠点形成プロジェクト (P & P) E タイプ No.19401 研究成果報告書, pp. 14-74.
- 上山あゆみ (2010) 『Predication の構造と解釈』, 未発表原稿, 九州大学.
- 片岡喜代子 (2006) 『日本語否定文の構造: かき混ぜ文と否定呼応表現』, 東京: くろしお出版
- 片岡喜代子 (2010) 「否定極性と統語的条件」, 加藤泰彦・吉村あき子・今仁生美 (編) 『否定と言語理論』, pp. 18-140, 東京: 開拓社
- 朴江訓 (2007a) 「「しか…ない」の「多重 NPI」現象について」, 『日本語文法』, 7-2., pp. 54-70.
- 朴江訓 (2007b) 「現代日本語における多重否定極性項目構文について」, 『日本言語学会第 135 回大会予稿集』, pp. 82-87.

- 宮地朝子(2010)「日本語否定文と文法化—シカ類の変化と変異を中心に—」, 加藤泰彦・吉村あき子・今仁生美(編)『否定と言語理論』, pp. 170-192, 東京: 開拓社
- Miyagawa, Shigeru (2005) "On the EPP," *MIT Working Papers in Linguistics* 49, pp. 201-236.
- Tanaka, Hidekazu (1997) "Invisible Movement in SIKI-NAI and the Linear Crossing Constraint," *Journal of East Asian Linguistics* 6, pp. 143-188.
- Ueyama, Ayumi (1998) *Two Types of Dependency*, Doctoral dissertation, University of Southern California, distributed by GSIL publications, USC, Los Angeles.
- Ueyama, Ayumi (2010) "Model of Judgment Making and Hypotheses in Generative Grammar," *17th Japanese/Korean Linguistics Conference*, UCLA, pp. 27-47.
- Watanabe, Akira (2004) "The Genesis of Negative Concord : Syntax and Morphology of Negative Doubling," *Linguistic Inquiry* 35 Number. 4, pp. 559-612.

## The structure and the interpretation of *indet-mo*

Tomoko Hironaga

(Fukuoka city)

This paper discusses the structure and the interpretation of an indeterminate in Japanese followed by a particle *mo* (henceforth, *indet-mo*) by carefully examining the interpretation of *sika* 'only'. *X sika V nai*, such as (87a), is known as yielding a contrastive implication as in (87b), in addition to its (more or less) straightforward meaning as in (87c).

- (87) a. Taro sika hon wo kaw-anak-atta  
Taro only books acc buy-neg-past
- b. Taro bought books.
- c. Everyone excluding Taro didn't buy books.

What is remarkable is the fact that an *indet-mo* has a universal interpretation when an *indet-mo* precedes *sika*, as in (88a), while it carries an existential interpretation when *sika* precedes an *indet-mo*, as in (88b).

- (88) a. Daremo John sika mi-nak-atta. (SOV)  
indet-mo John only see-neg-past
- ' All the people saw John, and they didn't see anyone other than John. '
- b. John sika daremo mi-nak-atta (OSV)  
John only indet-mo see-neg-past
- ' Someone saw John, and nobody saw the people other than John. '

This paper proposes that the two-way interpretation of an *indet-mo* shown in (88) results from the two structural positions that an *indet-mo* can occur in: an *indet-mo* itself denotes an indefinite group of people/ things and (i) when it is in the subject position of a predication, it yields a universal interpretation as a result, while (ii) when it is in the argument position of a negative predicate, it corresponds to an existential interpretation because of the fact that it serves as a target of negation.

(初稿受理日 2011年2月28日 最終稿受理日 2011年7月3日)